



名寄市立大学の窓から

知への誘い

vol.86



講師 今野 聖士

食農教育でつながる大学と農業・農村(2)

保健福祉学部 教養教育部

講師

今野 聖士

先月の同ページにて、農業・農村との距離が遠くなり、自身の『食』と『農』のつながりがイメージできず、『「ト」感をもつ学生が増えていること、大学ではその学生と農業・農村をつなげ、地域理解を進める食農教育に取り組んでいることをお伝えしました。今回はもうひとつの取り組みである「援農ボランティア事業」を紹介したいと思います。

現在、さまざまなところで『労働力不足』と言われていています。特に農業は、短期間かつ屋外作業などの労働環境のせい、ほかの産業よりも作業員が集められないという声を耳にします。このような地域課題に対し、大学では2018年度からコミュニケーション教育研究センターの研究事業として、



「援農ボランティア事業」を行っています。これは、市農務課・JA道北なよろ営農部の協力を得て、学生ボランティア(有償)を特定の時期に農業者に紹介する取り組みです。今年アスパラの収穫時期と夏休み時期の2回募集を行い、のべ27戸の農業者のところで、のべ約800人の学生が作業に従事することができました。

本学では、市外、特に都市部から入学している学生が多く、農業・農村との距離が遠くなっていました。このため、従来から学内のアルバイト掲示板に、農業アルバイトの募集がありますが、作業内容を想像できないばかりか、きつい作業のイメージが先行してしまつた。そのため、応募が少ない状況は、学生に農業・農村を知

ってもらい、心理的にも物理的にもハードルを下げることを目標にしています。心理的には学内で説明会を開催し、作業の内容を詳細に説明する機会を設けました。物理的には、長靴や作業着を貸し出し、手ぶらで事業に参加できるようにしました。細かいことですが、普段学生がアルバイトしている小売店などでは、制服が必要な場合は貸与が基本ですが、農業では自身で準備することが基本でした。続けられるか分からない作業に対して、まず数千円を自己負担して長靴や作業着を準備しなくてはならないという状況を改善することができました。この事業では、単に労働力として手伝つのではなく、農作業への従事と農業者と

対話を通じて、自身の健康を支える『食』の根源となる農業・農村を理解して欲しいという思いから、『農業アルバイト』ではなく、『援農ボランティア』と名付けています。受け入れてもらう農業者にとって、作業に不慣れであり、勉強との両立から参加できる日数が限られている本学の学生は、決して『能力の高い労働者』ではありません。しかし受け入れする農業者は、学生に食を支える名寄の農業・日本の農業の良き理解者となつて欲しいという思いから、学生を単なる労働者ではなく、食農教育の一環として受け入れ、忙しい中でもたくさんのお話をして下さっています。

これからも学生の食農教育の一環として、地域の方々のお力を借りながら、地域課題に取り組んでいきたいと思ひます。



大学図書館へようこそ！

大学では今年初めてセンター試験を実施しました。名寄市や近郊の高校生は、今まで旭川での受験を余儀なくされていまして、便利になりましたね。

学内では2月上旬に後期試験があり、それが終わるとやや長めの春休みに入りますが、4年生は国家試験へのラストスパートとなります。



【2月の開館について】

- ・日曜日と11日(火)、24日(月)は休館です。
- ・29日(土)からしばらくの間、17時で閉館となります。

◆問い合わせ

名寄市立大学図書館 ☎01654@7671(直通)

大学図書館にはこんな本があります

～く「知」への誘い～からもう1歩～

農業や地域とのつながりに関する本を紹介します。

『現場でつながる！地域と大学』

友成真一/著 東洋経済新報社

→地域と連携する大学のさまざまな事例を紹介しています。

『農をつなぐ仕事』

内田由紀子・竹村幸祐/著 創森社

→農業普及指導員の仕事を通してつながりの心理学を研究しています。

『農福連携の「里マチ」づくり』

濱田健司/著 鹿島出版会

→農業と福祉の連携について、発想・活動・事業・人々を紹介しています。